外国出張報告

ウイルス病研究チーム　上席研究員　村上　賢二

目的・用務：第１回OIEリファレンスラボラトリー会議
出張期間：平成18年12月1日～12月8日
出張場所：ブラジル国　フロリアナポリス

［用務の内容］

平成18年12月１～８日の日程でブラジル国フロリアナポリス市に出張し、第１回OIEリファレンスラボラトリー会議に参加した。国内からはOIEリファレンスラボラトリーである動衛研の横山隆チーム長（BSE）、山田俊治上席研究員（豚コレラ）、筆者（馬伝染性貧血）とJRA総研栃木支所近藤高志研究役（馬動脈炎）の4名が参加した。本会議にはOIE加盟167国より120カ国以上の参加があった。１日目午後のオープニングセレモニーでは、OIE生物学的標準委員会（BSC)会長のDr. Edwards、OIE事務局長のDr. Vallat、開催国ブラジルの農務大臣よりそれぞれ歓迎の挨拶があった。その後、歓迎パーティーが催された。

会議２日目は４つのセクションについて演題発表があった。セッション１(OIE reference laboratories and collaborating centres: Mandates and Rules)では、OIEの組織や活動、コラボレイティングセンターである国際原子力機関（IAEA)における疾病診断キットの開発、診断試験の検証法や国際協調について討議された。セッション２(Application of laboratory practices)では、OIEリファレンスラボと同様な組織であるWorld Association of Veterinary Laboratory Diagnosticians (WAVLD)の説明、バイオセーフティーとバイオセキュリティー、GLPとGMP、獣医診断ラボにおける診断の質について検討された。セッション3(Current status and approval of laboratory networking)ではレファレンスラボ・ネットワークの現状と改善点、感染性物質の国際輸送、インターネットを利用した新しい疾病発生通知システム（WAHIS)、FAOリファレンスラボとの連携について検討された。セッション４(New approaches)では、事前質問書の回答とデータ分析、OIE専門家の役割、国際的リファレンスラボ・ネットワーク作り、ワクチン開発のための新標準、分子生物学的技術を使った国際重要伝染病の診断法開発の試みについて討議された。

会議3日目は２つのセッションがあった。セッション５(The way forward)では、OIEリファレンスラボとCollaboratingセンターの相互関係の重要性、OIEリファレンスラボの効率的運営、EUにおけるラボ間ネットワークの歴史、疾病サーベイランスのサポートについて討議された。セッション６(Conclusions and recommendations)では発表された内容について活発な討論と会議における提言がなされた。

［所感］

セッションは分かれていたが、多くの発表演題に”ネットワーク”という単語がちりばめられ、その重要性が強調されているようであった。馬伝染性貧血は国内にその発生は見られず、その重要性とは裏腹に自身の研究は停滞したままである。しかし、回りを見れば、まだまだ馬伝染性貧血が常在している国は多く、必要とされればいつでも力になりたいと思っている。まずは、アジア地域とのコラボレーションに取り組んで行きたい。また、日頃は診断マニュアルに名前を見るだけであるOIEリファレンスラボ担当者と、実際に話をすることができたことは有意義であった。おわりに、今回の業務を無事遂行することができたことを、関係諸氏に深謝する。

会議の様子（山田上席撮影）

ポスター発表　(左)Dr. Beier(独､牛白血病リファレンスラボ)、(中)Dr.Konig　(独､馬伝染性貧血リファレンスラボ)､(右)筆者